＊東大附属調査結果概要

卒業研究の成績に関する調査研究

報告者　東京大学大学院教育学研究科　村　山　　航
東京大学大学院教育学研究科　高　橋　亜希子

東京大学附属中等教育学校で“卒業研究”が実施されるようになってから，20年以上が経過する。この間，卒業研究は教育実践として多くの変化・発展を経てきた。しかし一方で，卒業研究の成績を規定する要因が何であるのかに関して，定量的に検討した研究は見当たらない。本稿では，卒業研究の成績と，科目成績や卒業研究に関するアンケートとの関係の検討を行う。

データの概要

調査対象者と調査時期　東京大学附属中等教育学校のある１学年が対象であった。106名（男56名・女50名）であった。

卒業研究の成績　中間報告後の成績と，最終発表後の成績（それぞれ５段階評価）の合計値を用いた。卒業研究の成績は，完成された作品や，その作成過程などを考慮しながら，３人の教師による合議制で決定された。

科目成績　必修科目に限定して検討を行った。６年生の２学期における中間考査と期末考査の成績（それぞれ５段階評価）の合計値を用いた。

アンケート　卒業研究に着手する前（４年生の１月），中間報告終了後（５年生の１月）において，卒業研究に関するアンケートを実施した。アンケートの実施に当たっては，附属学校の先生方と生徒の全面的な協力を頂いた。本稿では，そのうちの一部の質問項目を取り上げて，卒業研究との関係を示す。

結果と考察

科目成績と卒業研究の成績との関係　Table １に科目成績と卒業研究の成績に関する相関行列を掲載する。

Table 1 科目成績と卒業研究の成績との相関行列

	1	2	3	4	5	6
1．英語	−					
2．英語オーラル	.78**	−				
3．数学	.54**	.46**	−			
4．現代文	.57**	.58**	.65**	−		
5．古典	.69**	.67**	.63**	.80**	−	
6．世界史	.58**	.53**	.65**	.72**	.78**	−
7．卒業研究	.33**	.39**	.31**	.43**	.47**	.35**

** $p<.05$

卒業研究は，全体として科目の成績と小－中程度の相関関係（.31-.47）にあることが分かる。卒業研究に必要な能力は，教科の力と全く無関係というわけではないことが示唆された。一方で，その相関は科目間の相関（おおむね.50以上）よりはやや低めである。従って，卒業研究は，教科学力との関係を持っていながらも，教科学力とやや違った力に関係していることが示された。

また，卒業研究の成績は，特定の教科と高い相関を持っているわけではないということも示唆される。すなわち，“国語に比べて数学は卒業研究の成績との関係が弱い”といったような，教科間の違いは見出すことができなかった。この点に関してさらに詳細な分析をした結果，卒業研究の学力は，特定の教科が支えているわけではなく，むしろさまざまな教科学力に共通した要素が支えていることが示唆された。

教科の成績と総合学習の成績の相関に関する先行研究としては，名古屋大学附属中学校で“総合人間科”の成績と教科成績の相関を検討したものがある（速水・田畑・吉田，1996）。そこでの相関係数は，.12-.50と今回の結果よりも教科間での違いが大きい。相関の高い教科は国語（.50），家庭科（.49），美術（.44），低い教科は体育（.17），数学（.12）と，表現力や体験活動が必要とされる教科との相関が見られた。今回の調査でこのような教科間の違いが見られなかった理由としては，学年全体で一つのテーマを行う“総合人間科”と比べ，卒業研究はテーマや表現形態が自由なため，特定の教科能力よりは全体的な能力が要求されたからであろう。この実践

形態と相関の関係についてはより詳細な検討が必要だと思われる。

このように，卒業研究の成績は，教科の学力と何らかの関係にあることが明らかになった。

アンケートへの回答と卒業研究の成績との関係 Table 2にアンケートへの回答と卒業研究の成績との相関行列を掲載する。なお，卒業研究の成績は，科目の成績から予測したときの残差を使用した。

“テーマ決定”とは，卒業研究に着手する前の段階で，テーマをもうすでに決めているかどうかに関する項目である。卒業研究の成績とは小-中程度の相関があり，テーマ決定をしている生徒ほど，最終的な卒業研究の成績が高いことが示唆される。はじめにテーマを胸の内に持っている生徒は，卒業研究に対する道筋がある程度つけやすく，そのため高い評価を得たのかもしれない。

Table 2 アンケートの回答と卒業研究の成績との相関行列

	1	2	3	4	5
1．テーマ決定	−				
2．意欲	.31**	−			
3．進捗状況	.32**	.32**	−		
4．教師からの指導	.07	.24*	.14	−	
5．作業従事時間	.20	.36**	.47**	−.08	−
6．卒業研究	.38**	.34**	.45**	.08	.24*

* p<.05 ** p<.01
注）作業従事時間はスピアマンの順位相関係数

“意欲”とは2回のアンケートにおける卒業研究に対する意欲の合計値である。卒業研究との成績と小-中程度の相関が見られる。つまり，卒業研究開始前・中間報告後に意欲が高かった生徒が，卒業研究の成績も高かったことが示された。総合学習のような学習形態において意欲の重要性がこれまで指摘されているが（奈須，1999），そのことが定量的に確認できたということができよう。ただし，あくまでも小-中程度の相関であり，そこまで意欲と成績との関係が強くないと考えることもできる。

“進捗状況”とは，中間報告終了時点で，どの程度研究の進め方に見通しを持っているかに関する項目である。やはり小-中程度の相関が見られ，途中段階でしっかりと見通しを持っている生徒ほど，卒業研究の成績が高いことが示唆される。卒業研究のように，構造化の度合いが低い学習では，途中の見通しをしっかりと持つことが大切なのだろう。

しかし一方で，“教師からの指導”と成績との間には相関関係があるという証拠は得られなかった。教師からの指導とは，指導教官からどの程度支援を受けているかに関する項目である。つまり，教師からの指導を受けていないからといって，必ずしも卒業研究の成績が低いわけではないことが示された。だが，この結果は，指導教官の支援が不必要だということを意味しているわけではないと思われる。なぜなら，指導教官からの指導を受けていない生徒には，“指導が不必要なくらい作業が順調である”生徒と，“研究があまりうまくいっておらず，指導が必要にも関わらず指導を受けていない”生徒の両者が混在しているからである。そのために，相関関係が見られなかったと考えることができる（Karabenick & Knapp, 1988）。この相関の解釈には慎重になる必要があるだろう。

最後に，“作業従事時間”と総合学習の成績は，小さい正の相関が見られた。ここでの作業従事時間とは，中間報告後における，1ヶ月あたりの作業時間数である。やはりその途中過程において，堅実に努力をしている生徒ほど，最終的な成績が高いことが示唆されている。ただし，その相関は小さなものである。たしかに投入した時間は大切であるが，それだけで卒業研究の成績が規定されているわけではないことが示されたと言えよう。

以上のように，卒業研究の成績は初期のテーマ設定や，卒業研究に対する意欲，中間過程における見通しや努力量などと関係していることが明らかになった。

終わりに

卒業研究の成績を規定する要因に関して，教科の成績とアンケートへの回答結果の2つの観点から検討を行った。卒業研究といった，いわゆる“総合学習”の形態に近い学習の成績と，他要因との関係を定量的に示した研究はこれまでにあまり見当たらない。その意味で本稿は，卒業研究のみならず，総合的な学習の時間に対する貴重な資料となるだろう。また東大附属学校においても，総合学習と教科学習を2本の柱として“ことばの力”“論理の力”“関係の力”“身体・表現の力”“情報の力”の5つの力を育てることが目指されており，総合学習と教科との関係性が明らかになることは当校の実践に対しても有益と思われる。今後はこれらのデータをより詳細に検討し，要因間の関係などについて明らかにしていく必

要だろう。

引用文献

Karabenick, S. A., & Knapp, J. R. 1988 Help seeking and the need for academic assistance. *Journal of Educational Psychology,* 80, 406-408.

奈須正裕 1999 総合学習を指導できる教師の力量 明治図書

速水敏彦・田畑治・吉田俊和 1996 総合人間科の実践による学習動機づけの変化 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 43, 23-25.